

---

# 御伽銀行と無重の剣士

虹の光

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

御伽銀行と無重の剣士

### 【Nコード】

N89640

### 【作者名】

虹の光

### 【あらすじ】

虚刀流鑢七花と鑄白兵の子孫、鑄白花がオオカミさんと七人の仲間たちの世界で暴れるそんな御伽話。

超不定期更新

第1話（前書き）

それではおじいちゃん！

## 第1話

少年「父さん何故、逝ってしまった？あんなに全刀流を極めたあなたがあんな形でこの世を去るなんて……。母さんあなたも何故逝ってしまった？あんなに虚刀流を極めたあなたもこの世を去るなんて。しかし、もう関係はありません。今そっちに行きます。」

少年は刀を首筋に付けて自らの命を断とうとしたその時

？「ちよつとその自殺待った！」

少年「誰だ！」

少年が振り向くとそこには10歳ぐらいの少女が立っていた。

少女「君が錆・白花君か。僕の名前は彼我木輪廻。一応、仙人だよ。」

白花「仙人？それに彼我木輪廻ってまさか誠刀・銓の！？？？」

輪廻「そうだよ。それより白花君。君を迎えに来たよ。」

白花「迎えに？」

輪廻「そつ。迎えにね。四季崎記紀に頼まれたんだよ。」

白花「四季崎記紀に。何故？」

輪廻「彼は言ってたよ。君みたいな刀をこのまんま手入れもせず錆びられさせておくのは勿体ないってね。」

白花「俺が刀？」

輪廻「そうじゃないかあ白花君。君は完了形態刀『虚刀・鑢』と完了形態刀の候補だった『全刀・鑢』の両方の性質をしかも、“いいとこ取り”した最強の刀じゃないか。』

白花「昔、書物で読んだが四季崎記紀の刀作りは虚刀流七代目当主・鑢七花の代で完了したと書いてあったが俺は四季崎記紀によって作られたのか？」

輪廻「君は四季崎記紀とこの時代の共同制作によって作られた言わば『究極形態刀虚刀・鑢』ってところだろうね。」

白花「俺が究極形態刀虚刀・鑢。つで俺はどこに連れて行かれるんだ？」

輪廻「おやつ？自分が四季崎記紀の刀だったって事より自分がどこに連れてかれるのが気になるんだ？まあいいか拒否されても無理やりにも連れて行くし。」

白花「やっぱり拒否権は無かったか。んでどこに連れて行かれるんだ？」

輪廻「君がこれから行くのはことは別の世界さ。別の歴史を辿った世界なんだけどね。この世界と全然変わらないよ。」

白花「別の世界か…。この世界に居る理由は無いら。俺は行くぜ。」

輪廻「そうかいそうかい！じゃあ行くう。その前に白花君これ四季崎記紀からの贈り物だよ。」

輪廻が適当に指差したところに光が表れ、そこにあつたのはあの四季崎記紀が作った完成形変態刀12本全てと一冊の本があつた。白花「なんで完成形変態刀が全部あるんだ？あれはもう壊わされたんじゃないのか？」

輪廻「四季崎記紀が神様に頼んで直したらしいよ。まあ、刀の毒が少し薄れたらしいけどね」

白花「この本はなんだ？」

輪廻「この本は“戦国忍大全”っていう本で僕が色々集めて書いた本でねえ。真庭忍法や相生忍法、その他色々な技が書いてある本だよ。オマケにあげるよ。向こうの世界で頑張つて修得してね。」

白花「おっ…おっ。」

輪廻「向こうに着いたら最初に何をするのか紙に書いておくから読んでね。それじゃあ行こうか！」

白花「って！？うっ、うわ〜！！！？？」

白花は輪廻から溢れでる光に包まれた。

白花が目覚めますとそこはどこかの道場だった。

白花「ここは…何処だ？」

輪廻「目が覚めたようだね白花君。ここがこれから君が暮らす御伽

道場だよ。一応君の名機になつてゐるから好きに使つてね。ちなみに母屋はその先の廊下を渡つてすぐだから。」

白花「変態刀と書物は？」

輪廻「それは外の蔵に全部しまつてあるよ、なにせものもものだからね。あつそうそう来週の月曜に君が通うことになる御伽学園の編入試験があるからしつかり勉強しておいてね。」

白花「おいおい。来て早々試験かよ。まあいいか！勉強は嫌いじゃないし。」

輪廻「それならいいや。じゃあ僕は消えるから。勉強もいいけどちやんと修業もするんだよ。それじゃあねー。」

すると、彼我木輪廻は道場から姿を消した。それから白花は編入試験が近いためほとんどを勉強に費やした。そのかいあつてか編入試験で御伽学園至最高得点を叩き出した。というより白花は元々、勉強はできる方で近所では評判の神童だったため当然の結果だった。そのおかげで御伽学園もとい御伽花市を牛耳つてゐる荒神学園長から一つだけ願いを聞き入れてくれることになり、白花は1ヶ月の休学を申し出て、受理された。白花はその1ヶ月を修業に費やした。まず手始めに真庭忍法から真庭蝶々の忍法“足軽”を会得し、続いて真庭蜜蜂忍法“撒菱指弾”を会得した。また、真庭忍軍と敵対していた相生忍軍の忍法“声帯移し”や相生拳法“背弄拳”を会得した。白花は忍法だけに飽きたらず四季崎記紀の完成形変態刀の一つ“薄刀・針”を使つた修業を始めたのだ。白花ものの二週間で“薄刀・針”を使つた技は先祖である錆白兵の技を会得したのだった。しかし、彼に刀の毒？というか異常事態が起きるのは少し先で語ることになる。そんなこんなで1ヶ月はあつという間に過ぎていった。

白花「今日から新しい学生生活が始まる。よし。」

白花は今、教室前にいる。中では先生が編入生（白花）が来ることを話していた。そして

先生「どうぞー。」

白花「はじめまして。鏗白花です。趣味は剣術の修業です。これからよろしくお願いします。」

丁寧な口調で自己紹介をし、一礼した。鏗白兵と瓜二つの容姿だけあって立ち振舞いが美しく、女子生徒のほとんどが白花にときめいた。ちなみに白花が着ている制服は白地のほとんど胴着のようなワイシャツに完全に袴に改造されたズボンを着ている。左手にバツクを持って、右手には薄刀・針を竹刀袋に包んで右肩に担いでいる。（薄刀・針は荒神会長の許可を得て帯刀しているが形は刀でも薄刀の外見があまりにもガラス細工に似すぎていた為か銃刀法違反に引っかけからなかった。）

その後、授業を全て受け、放課後になった。

白花「そろそろ頼まれた場所に行くか。確かクラスに関係者がいたんだっけ。」

そう言つて一人の女子生徒に話し掛けた。

白花「あの〜赤井林檎さんだよ。悪いんだけど御伽銀行ってどこにあるかな。」

林檎「確か鏗君でしたわね。良かったら案内しますの。」

白花「ありがとう赤井さん。頼むよ。」

白花は赤井さんに案内され、御伽銀行に向かった。

林檎「鏗君、着きましたの。此処が御伽学園学生相互扶助協会通称“御伽銀行”ですの。」

白花「此処が御伽銀行。案外小さいな。」

林檎「一応部活ですからこんなものですよ。で、どんな依頼なんですの？」

白花「依頼じゃないんだ。これを読んでくれ。」

白花は林檎に手紙のようなもの渡した。

林檎「これは！鏗君こっちに来てくださいですよ。」

白花「ああ。」

白花は林檎に連れられ、棚の方を向いた。何の変哲のない棚だったが林檎が棚の脇を持ってスライドさせた。すると、そこから隠し階段が現れた。

白花「こっ…これは！」

林檎「どうぞですよ。」

林檎に先導され、白花は階段を降りた。

林檎「こんにちはですよ。」

？「こんにちはは赤井さん。」

？B「こんにちは。」

奥のデスクに座っている金髪の少年と眼鏡を掛けた絶対零度の言葉がぴったりな少女が立っていた。

？「あれ、奥にいる彼は誰だい？」

？B「見ない顔ですね。」

林檎「今日編入した鯖白花君ですの。」

白花「どうも。」

？「此処に来たってことは依頼じゃないね。」

林檎「そうですの頭取。」

白花「頭取さんこれを。」

白花は林檎に見せた手紙を頭取に渡した。

頭取「へえ、君がそうだったのか。会長からは話は聞いてるよ。

御伽銀行にようこそ。僕は御伽学園二年の桐木リスト、一応御伽銀行の頭取だよ。これからよろしくね。こっちが僕の従兄弟で同じ御伽学園二年の桐木アリス君。」

アリス「どうも。」

林檎「手紙には何て書いてありましたの？」

リスト「手紙かい？手紙にわね彼を御伽銀行に入部を認める内容だ

ったよ。」

林檎「入部ってなぜですか？」

リスト「彼はね今、御伽学園で密かな噂になっている。“無重の剣士”その人だよ。」

林檎「えっ!!! 鯖君があの。」

林檎は白花を見返した。

白花「一応そうだけど。」

白花は曖昧な返答をした。

林檎「無重の剣士といえば御伽学園の生徒が鬼ヶ島高校の不良に絡まれているの何回も助けたり、高い塀の上で降りれなくなった猫を塀の壁を歩いて助けたり、仕返しに来た鬼ヶ島高校の不良をガラス細工のような綺麗な刀で返り討ちにしたとか色々噂がありますけど本当ですか？」

白花「だいたい本当だよ。」

林檎「そうでしたの。」

リスト「話中に悪いんだけど、鯖君は入部するのかい？」

白花「学園長の頼みだし、入るよ。」

リスト「そうかいそうかい。君みたいな腕の立つ人が入部してくれると助かるよ。」

アリス「錆君には悪いのですが早速、依頼をこなしてもらいます。」

白花「良いですよ。どんな依頼ですか？」

アリス「内容は、最近鬼ヶ島高校の生徒が学園の生徒を恐喝する事件が多発している場所に行き、今後このような問題が起こらないように解決してほしいと生徒会からの依頼です。」

リスト「あっそれとね、君の本当の実力がどれくらい知りたいから今回は誰も手をだしちゃ駄目なのと、錆君、君が持っているそれを使って戦って欲しいな。それとね赤井君には彼の戦ってる様子をビデオに撮影してほしいんだ。」

林檎「はいですの！」

白花「お…おう。」

林檎「錆君、どうしたんですの？」

白花「何でもないよ…とほほ。」

林檎「？」

二人は依頼にあった通り、恐喝が多発している場所に向かった。案の定、着くとそこでは学園の生徒一人が鬼ヶ島の不良三人に恐喝されていた。

生徒「すすすみません。もう勘弁してください。」

不良A「うるせえ。早く金よこせ！」



不良Bは不良Cが一瞬で倒されたことが理解できなかった。不良Cがひとりでにぶつ飛んで気絶したようにしか見えなかったのだ。しかし、それは当然だった。なぜなら、“鏡花水月”は虚刀流の奥義の中で最速を誇る技であり、並みの動体視力でしかない不良Bにはそうでしか見えないのだ。無論、ビデオでこの様子を録画している林檎にもそうしか見えなかった。

不良B「オメエよくも…くらえー!!!」

続いて不良Bが鉄パイプを持って、白花に突進して来た。しかし

白花「忍法“足軽”!!!」

白花は鉄パイプを持って突進して来た不良Bの鉄パイプを受け止め、鉄パイプごと不良Bを持ち上げて、ひょいっとした感じで段ボールの集積しているところに放り投げた。不良Bは段ボールに衝突し、そのまま気絶した。白花が使用した忍法“足軽”は自らと自分が持つ重さを無くす忍法でありどんなに重いものでも軽い物と同じように扱うことが可能なのだ。

不良A「よくも、コイツらをタダで帰れると思うなよ。」

白花「タダ帰れないのはそっちの方だぜ。」

不良A「ふん！抜かせ。」

白花「赤井さん。これ使わないとダメか？」

林檎「ダメですの錆君。頭取の言った通りそれを使ってくださいさ  
いのですの!」

白花「はあ、仕方ない使うか…使うのに抵抗あるけど。」

そう言つて白花は竹刀袋から一本の刀を取り出した。そう、彼の先祖である錆白兵が使いし完成形変態刀、薄刀・針であった。

不良A「そつ…その刀は！オメエがあのだ“無重の剣士”！！！！！！！！」

白花「早速始めようぜ、鬼ヶ島の鬼さん。」

白花が薄刀を構えたその時から白花の空気が一変したさながらそれは、現代に生きる侍のようだった。

不良A「くつ…くそー！！！！」

不良Aが飛び掛かった次の瞬間

白花「拙者にときめいてもらつてくれるよ。」

キーン

一瞬の刹那、二人が交錯し白花の峰打ちが不良Aに炸裂した。不良Aは眠るように倒れた。

不良A「かつ…かつこいい。」

白花「ふんっ。」

白花は薄刀を鞘に戻した。

白花「はあく。」

林檎「錆君あの時、ほんの少しですが、キャラ変わってましたわよ！」

白花「あっ…あれな。いつも薄刀を抜くとああなるんだよね。」

白花が薄刀を抜いたとき、キャラが変わるのは復活して少し刀の毒が薄くなった薄刀の毒の所為だった。白花がこれに気づいたのは白花が荒神学園長の頼みで荒事を処理するようになって少ししてからだった。だが、彼がいつも薄刀を帯刀しているのはこれを鬼ヶ島高校の不良に見せることで自分が“無重の剣士”であることをわからせ荒事を起こさせない為だった。こうして、“無重の剣士”こと錆白花の御伽学園での生活がスタートしたのだった。

## 第1話（後書き）

頑張って書いて行きたいです。

## 主人公設定（前書き）

この作品はアニメ沿いで行こうと思います。

## 主人公設定

### 主人公紹介

錆びはくか  
錆白花

鑓七花と奇策士とがめの刀集めの旅から数百年後の世界の錆家に産まれる。父親は錆家に伝わる全刀流（全刀・錆）の継承者であり、母親は鑓七花の子孫であり鑓七実と同じく「見稽古」が使える、兄弟が親から虚刀流の教えている姿を見て虚刀流の技を修得した。白花には夫が白花に全刀流の修業を始めたのと同時期に虚刀流を教えはじめた。しかし、両親兄弟ともすでに亡くなっており本編冒頭で白花の両親も亡くなった為、鑓七花の子孫は白花のみとなっている。

身長172?、体重54?

身分・学生剣士

所属・御伽銀行

趣味・剣術の修業

使用奥義

虚刀流一式（例・七花八烈改）

全刀流剣術

忍法“足軽”

忍法“撒菱指弾”

相生拳法“背弄拳”

相生忍法“声帯移し”

## 主人公設定（後書き）

これからもよろしく願いします。

## 第二話（前書き）

明けましておめでとういっしょに暮らします。

## 第二話

白花が御伽銀行に来て1週間がたった。しかし、この1週間が長く密度の濃い物だとは白花は思っていなかっただろう。

白花「ただいま〜ふう〜疲れた。」

林檎「鯖君お帰りなさいですの。」

林檎が迎えてくれたが白花はソファーに座ってぐったりしていた。

白花「頭取。…あれは鬼か？」

林檎「頭取も人使い荒いのです。鯖君今週1週間どれくらい働いたんですの？」

白花「いっぱい…。」

完全にグロッキーだった。見兼ねた林檎はパソコンを開いて御伽銀行のデータベースから白花のデータを見るとそこには

月曜日

全国大会に出場した剣道部に助っ人として出場。勝ち抜き制の団体戦で大将で出場し、あっさりとその他剣道部員が負けて大将だけで善戦し見事優勝。個人戦も優勝。

火曜日

関東大会出場をかけたウエイトリフティング部に助っ人として参加し優勝。関東大会に出場決定。

水曜日

県大会出場をかけた陸上部に助っ人として参加。短距離走に出場。リレー・個人走とも優勝し陸上部は県大会出場決定。

木曜日

御伽学園の学生御用達のコンビニの依頼で鬼ヶ島高校の不良が来ないようにするためにアルバイト兼ボディガードとして働き、たむろいに来た不良達をあっさり撃退。

金曜日

荒神財閥の傘下である荒神SPサービスに講師として派遣され社員に指導を行った。その他御伽学園のテリトリー内で起こった不良絡みの事件を数件解決。

林檎「働きすぎですね」

リスト「錆君もお疲れ。お陰で色々なところに貸しができたよ。」

白花「面倒だ…」

リスト「そう言わないで。次も頑張って！」

白花と頭取の話が続く中、ご存じの方もいらっしゃるだろうが御伽銀行のシステムを説明したいと思う。

御伽銀行とは依頼された依頼を解決し依頼人に“貸し”を作り後で

依頼人に解決した依頼に合った“借り”を返してもらってもしくは、貴重な情報を提供することで相殺する言わば生徒の学園生活を良くしていくことをうたい文句にして学園を陰で支配する悪の組織的な部活なのだ。

リスト「ところで赤井君。大神君と森野君はいつ戻るのかな？」

林檎「そろそろだと思いますの。」

白花「赤井さん。大神さんは同じクラスで有名だから知ってるけど、大神さんって御伽銀行の所属だったのか？それより森野って誰？？」

林檎「靖君は面識ありませんでしたわね。大神さんこと涼子ちゃんも同じ御伽銀行所属ですの。あと森野君。森野亮士君は同じクラスで靖君が入部した少し後で入部しましたの。しかも、森野君は涼子ちゃんに告白中ですの！」

白花「告白ってすごいな。でも同じクラスに森野亮士なんて居たっけ？」

林檎「補足しますと森野君の実家はマタギで影を薄くする技術はお爺さんから学んだそうですの。でもその所為で極度の視線恐怖症になりましたの。」

白花「へえ。」

白花と林檎が話終わると同時に銀行の隠し扉が開いたそこには二人の男女がいた。

涼子「戻ったぞ。」

亮士「ただいま戻ったっす。」

林檎「涼子ちゃんに森野君おかえりですの。」

涼子「おう！林檎。帰って来たぞ。」

林檎「依頼はどうでしたの？」

涼子「依頼は解決したよ。最後数人の不良に囲まれたけど、今回は亮士が盾になってくれて助かったぜ。／＼／＼あれは…ナイスだった／＼／＼」

亮士「涼子さん。ありがとうっす！！！」

涼子「いちいち言うな！」ゴツン！！！」

涼子の鉄拳が亮士の頭に激突した。

亮士「あだっ！なにするんっすか涼子さん！」

白花「ふーん。仲良いんだな。」

林檎「はいですの！」

林檎も白花の意見に同意した。

林檎「涼子ちゃん、森野君紹介しますの。鏗白花君。森野君が入部する少し前に入部して1週間のほとんどを依頼で学校は公欠してま

したからすれ違いで会っていませんでしたの。」

白花「どうも」

涼子「おう！よろしくな。」

亮士「よろしくッス。」

リスト「え〜っと白花君が会ってない人は確か〜」

？「お茶が入りました。」

メイドさんが現れた。

リスト「そうそう鶴ヶ谷君だ。鏗君、彼女は鶴ヶ谷おつう君。僕らと同じ二年生だよ。」

おつう「鶴ヶ谷おつうと申します。今後ともよろしくお願いします。」

白花「鏗白花です。こちらこそよろしくお願いします。」

リスト「あとは魔女君かな」

白花「魔女？」

白花が疑問符を抱えていると

ドカーン！！！！

爆発音が奥の方から聞こえて来た。扉の隙間から煙があがっている。

リスト「今日は珍しく失敗したようだね。魔女君の実験。」

白花「実験？」

リスト「魔女君は色々な発明とか実験をしてるんだよ。」

白花「はあー。」

リスト「あとは、浦島君と竜宮君ぐらいかな。」

頭取が二人の説明をしようとしたとき別の部屋から物音がした。

？「太郎様……」

浦島「ちょっと待て乙姫。うわ……」

部屋から明らかピー音が出てきそうな音が響いていた。その日は依頼はなく定時解散になった。白花は林檎と亮士とでボクシングジムに行く涼子を見送って三人で帰った。最初に林檎が抜け亮士と白花二人だけになった。

亮士「錆君あの御伽道場に住んでるんツスか？」

白花「ああ一応住んでるよ。それより呼ぶ方は白花でいいぜ。同い年なんだし。」

亮士「そうツスか。これからはそう呼ぶツス。だったら俺も亮士でいいツス。」

白花「そうか。俺もそうする。これからよろしくな亮士！」

亮士「こちらこそよろしくッス。」

白花「おっと。この角を左に行くと道場なんだまたな亮士。」

亮士「俺の住んでる所と意外に近いんッスね。今度招待するッス。  
白花君もまた明日！」

こうして二人はそれぞれ家路についた。そして翌日、ある依頼人が御伽銀行を訪れた。対応したのは、白花と亮士と涼子の三人だった。

依頼人「助けてください。借りは何でもお返しします。」

涼子「それは良いからどんな依頼なんだ？」

依頼人「実は大神さんをお願いしたいことがあるんです。大神さんは荒事担当だと聞いたので。」

一瞬の沈黙が訪れる。確かに大神涼子は御伽銀行に来る依頼の中で荒事を解決しているから荒事担当と言えなくもないが目の前ではつきり聞かれると少し考えるところがあるように見えた。

涼子「でどんな依頼なんだ？」

涼子「もう一度聞き直す。」

依頼人「実は昔付き合っていた彼が復縁を迫って来て…」

涼子「恋愛絡みか。多い依頼のひとつだな、で？」

依頼人「今日の午後3時にこの場所に来て欲しいってそうすれば復

縁は諦めるって。でも、会った時何かされると思つと怖くて。」

そう言つて依頼人は待ち合わせ場所の地図を出して見せた。

涼子「三角公園か。わかった。行つて見るよあんたも一緒に行くか？」

依頼人「いえ、いいです！本当に怖いんです！！！」

涼子「わかった。話はこつちでつけて来る。」

依頼人「ありがとうございます。失礼します。」

そう言つて依頼人は出て行つてしまった。

白花「んで誰が行く？」

涼子「俺が行く。俺に来た依頼みたいなものだからな。」

亮士「涼子さん一人じゃ危険ツスよ。俺も一緒に行くツス！」

涼子「亮士。お前は付いて来ない方がいい。」

亮士「涼子さんが何と言おうと付いて行くツス。だからお願いツス！！！！涼子さん！！」

涼子「仕方ねえな。付いて来るなら付いて来い。ただ、危険になつたら逃げるよ。いいな？」

亮士「わ…わかったツス。」

白花「俺は頭取達が帰って来るまで待機してるか。大神さん、亮土助けが必要だったらすぐ連絡を入れてくれ。」

涼子「サンキュな鏝。」

亮土「ありがとうツス白花君！」

二人は白花に見送られて依頼のある場所に向かった。現在、御伽銀行に居るのは白花一人だけであり、二年生の先輩方は商店街に買い出しに（頭取も連行）、浦島と乙姫は学校内でおい駆けっこ中（いつもの事）、林檎はクラスの日直で遅れるとの事だった。白花は一度、地下本店に戻った。

白花「うーん。なんで依頼人は大神が依頼を担当させるような事を言ったんだらう？」

白花はひとつ疑問に感じていた。依頼人はなぜ大神に担当させるようなことを言ったのだらうか。荒事なら大神でなくても自分が対応できるし相手が男なら大神ではなく白花に依頼をお願いしても別におかしくはないはずだ。確かに、大神は白花よりも先に御伽銀行に入って数多くの依頼を解決しているし大神の名を知っている人も少なくないだらう。しかし、白花は入って1週間がたつたぐらいで最近大きい依頼を解決したが認知度では大神には劣っている。だが、依頼人は依頼が受理されてもどこか落ち着かない様子だったがとても引掛かるのであった。

白花「うーん。気になるなあ」

林檎「ただいま来ましたの。あれ、鏝君しか居ませんか？」

白花「あっ！赤井さん。頭取達なら出掛けたよ。大神さんと亮土は依頼で出ていったよ。」

林檎「そうでしたの。ところで錆君はさっきから何考え事してましたの？」

白花「ああ。大神さんと亮士が受けた依頼なんだけど依頼人がなんだか少し変だったんだよ。」

白花は依頼人のことを林檎に話した。林檎も

林檎「確かにそう言われると依頼人の人なんだかおかしいのですが、涼子ちゃんがいればよほどの事がない限り大丈夫ですよ。」

白花「そう言われてもな、なんか心配になるんだよ。」

林檎「はーん。もしかして錆君も涼子ちゃんが気になるますの？心配って亮士が涼子ちゃんの傍に居るのが心配じゃないんですの？」

白花「それは違う。けど心配だから行って来るよ。何かあったらその時はよろしく。」

そう言つて白花は地下本店から出ていってしまった。

林檎「ちよつと錆君！あらあらもう行ってしまいましたの。もしかしたら本当に涼子ちゃんの事が好きかもしれないですね。」

白花は御伽銀行を飛び出して三角公園に向かっていた。一方、大神達は三角公園に着いていた。

亮士「ここツスよね？」

涼子「そうだな。もうそろそろはずだ。」

二人は依頼人の元彼が来るはずの時間には三角公園に着いてた。しかしそこには現れたのは元彼ではなかった

不良「あんたが大神涼子か？」

涼子「誰だ！！！？」

そこに現れたのは、鬼ヶ島高校の不良達だった。数は16人、明らかにリンチだった。

涼子「おい！ここは鬼ヶ島のテリトリーじゃないだろ。」

不良a「喜べ、うちのボスがご指名でわざわざ迎えに来たんだ。」

涼子「そんなの知った事か。」

不良a「そんな事言われてもな。ついてきてもらわないとこっちが困るんでな。」

不良達が涼子と涼子を囲いこむ。涼子は制服の赤いスカーフを利き腕に巻き付ける。

涼子「亮士。お前は逃げる。この人数に盾は通用しない。」

亮士「でも…涼子さんをひとりにしておけないッス！」

涼子「亮士…」

ゴッ

鈍い音が響く。不良の一人が亮士を鉄パイプで殴打した。

涼子「くそっ！ テメエー！！！！！！」

それをきっかけに涼子が不良達に殴りかかった。だが、1対16ではさすがの涼子も歯が立たず不良の一人の一撃をくらい気絶してしまった。

その頃、御伽銀行地下本店では買い出しにでていた頭取達が帰っていた。しかし、依頼に出た涼子と亮士。二人の後を追いかけた白花の帰りが遅いことを心配していた。

林檎「それにしても三人とも遅いのですの。」

アリス「確かにとても遅いですね。依頼で何か起きたのでしょうか？」

林檎「でも、鏗君が後を追ったから大丈夫だとは思うのですけど…」

リスト「こんなに遅いとなると何か問題があったと考えるべきなんだろうけどね。」

すると、

ガチャ

いきなりドアが開いた。そこにいたのは

亮士「涼子さんが…」

森野亮士が頭から血をだしながら立っていた。

林檎「森野君！」

亮士「涼子さんが不良に鬼ヶ島の不良に捕まったッス…」

林檎「えっ！なぜですか？」

亮士「さっき依頼で三角公園に行ったら、依頼人の元彼が来るはずが鬼ヶ島高校の不良が大勢来たんッス。涼子さんは俺に逃げろって言ったんッスけど俺、不良の一人に気絶させられて目が覚めると誰もいなかったんッス。」

林檎「そうでしたの。それよりも涼子ちゃんがどこに監禁されているかを探るのが先決ですよ！」

亮士「そうッスよね…」

その頃アリス先輩がどこかに電話をしていた。

アリス「はい、ありがとうございます。あの依頼人は鬼ヶ島の不良に脅されて大神さんに依頼したそうです。」

リスト「アリス君、浦島君達を召集して。みんなで手分けして探すよ。」

亮士「頭取！俺に…俺に任した欲しいッス。」

時を同じくして、とある廃工場。ここに、涼子とあともう一人が人質になっていた。

涼子「此処は…」

涼子は目が覚めるとそこは霞がかつた場所だった。ここは、涼子の夢の世界だった。

?「ねえ。なんで嘘つくの?」

涼子「嘘。俺は嘘なんかついてねえ。」

?「嘘ついてるよ。自分は強いつて…」

涼子「嘘なんかついてねえ。俺は強い。」

?「自分は強いつて嘘を言つて。心の中では誰かに助けて欲しいって思つてる。」

涼子「俺は…俺は…」

?「“オオカミ”の毛皮を着た“大神さん”。」

涼子「ハッ!」

霞がかつた涼子の夢の世界に現れたのは小さい頃の涼子だった。

涼子「夢だったのか…」

?「そつちも目覚めたか?」

突然のうしろからの問いかけに一瞬誰だかわからなかったがすぐ理解できた。

涼子「って白花！なんで捕まってる？」

白花「依頼人に少し不審な点があつてな。何かあると大変だと思つて後を追いかけたんだ。でも、三角公園に着いたら亮士は倒れてるしあんたは気絶して良い人質になつてるし、お陰で俺も晴れて人質に一人なつたんだ。気がかりなのは一人公園に残された亮士が気がかりなだけだな。」

涼子「そつ…そつか、悪い事したな。亮：亮士なら大丈夫だあいつはヘタレだが案外タフだ。」

白花「ふーん、なら安心だ。本当に亮士に惚れてんだな。」

涼子「惚れなんかねえー！」

不良「人質のクセにうるせえぞ！！！！！！！！」

工場の中にぞろぞろと不良達が入ってきた。数は公園に来た人数の三倍の60人くらいだ。

？「あんたが大神涼子か？喧嘩が強いとは思えねえな。」

涼子「あんたが鬼ヶ島のボスか。鬼ヶ島は人質を取らないと喧嘩のひとつも出来ないのか？」

鬼ボス「うるせえ。俺はあいつの言うあんたがどんなもんか見てみ

たかつただけだ、勘違いするな。」

涼子「鬼ヶ島に俺の知り合いは居ねえが？」

鬼ボス「あんたは有名なんだよ大神涼子。それに無重の剣士。」

白花「俺の二つ名は不良には有名だったんだな。」

鬼ボス「鬼ヶ島の誰もがあんたの二つ名を知っているぜ。だが、あんたは後だ。大神とのお楽しみが先だ。」

白花「先に俺と楽しもうぜ、鬼ボス。俺を倒せばあんたの武勇は御伽花市一だぜ悪くないだろ？」

鬼ボス「悪くねえが、俺は女が先だ。」

白花「悪いが俺はそうしてられないんだ。こうなってる以上、俺はあんたと戦うしかない。」

白花の後ろから縄が解ける音がした。音が終わると白花は立ち上げり涼子の前方にたつた。

白花「こんな時どんな事言ったらいいのか解らないけどさ、背中に



二の奥義・『花鳥風月』

三の奥義・『百花繚乱』 四の奥義・『柳緑花紅』

五の奥義・『飛花落葉』

六の奥義・『錦上添花』

七の奥義・『落花狼藉』

これもできるだけ手加減をして、7人共軽症で済んだが不良7人全員がその場に倒れた。

不良a「あれが無重の剣士の實力なのか!？」

不良b「ハッ…ハンパネー」

不良c「勝てるはず無いだろ!」

白花の圧倒的な實力に不良達は絶望していた。そして、それに追い討ちを掛けることが起きた

ピュン ピュン

不良d「痛っ!」

不良の一人に何かが飛んで来た。突然のことに白花も驚いたが飛んで来た方向から声が聞こえてきた。

?「涼子と白花は無事か?」

涼子「その声…亮士?!」

その声は亮士の声そのものだったが何かが違う。いつものどこかおどおどしたヘタレではなく男らしい安心感のある声だった。

不良a「何だあ〜?」

亮士「涼子と白花は無事かと聞いている。」

不良a「隠れてないで出てこい、隠れてたら俺らの顔見れないだろ?」

亮士「その必要はない。お前らのマヌケ面はここからはつきり見える。」

ピュン ピュン

亮士は再度不良達に何かを放ち続けた。白花はそれ見てそれが何かはつきりわかった。

白花「パチンコ玉!?!」

不良a「あだつ!」

不良b「痛て!」

亮士の放つパチンコ玉は不良達に次々と当たっていく。

林檎「涼子ちゃん。頑張りましたのね。」

涼子「林檎！」

林檎が涼子の前に現れた。

涼子「どうして此処がわかったんだ？」

林檎「この子達のおかげですの。」

林檎のうしろには二匹の秋田犬がいた。なんでも、亮士が実家から連れてきた犬でエリザベスとフランソワと言っらしい。亮士は二匹に涼子と白花の匂いを追わせたてこの場所を探し出したのだ。

林檎「私もびっくりしましたの。森野君、人が居ないところだと急に男らしくなりますの。」

涼子「はあ？」

白花「なあ、亮士が使ってる武器ってスリングショットか？」

林檎「そうですね。頭取の発案で、森野君もスリングショットは子供の頃から使ってたらしいですの。」

白花「へえ。」

涼子「あいつ…よしっ！俺も行くか。」

林檎「そう言うと思ってましたの。はいっ涼子ちゃん“ネコネコナツクル・改”ですの。」

涼子は林檎から“ネコネコナツクル・改”をもらつと早速手に嵌めて不良達の中に飛び込んで不良の一人を殴った

不良a「があー！！！！」  
何でもスタンガンと同じく電流が流れるらしい。だから女の子でも安心して戦える

林檎「錆君はいつ！忘れ物ですの。」

白花「ありがとう。ってこれ薄刀・針？何でー！！！！！！」

林檎「錆君が銀行に忘れ物してたのを持ってきたんですの。」

白花「これで俺も戦えと？」

林檎「はいですの！」

白花「はーあ。わかった。」

白花は渋々、薄刀を腰に差すと、

白花「適当に遊んで来るでござるよ。」

刀の毒ならぬ錆白兵モードに変わった。

白花「“爆縮地”！！！！」

物凄い速度で不良達に突っ込み、

白花「“一揆刀銭”！！！！」

爆縮地の速度を利用しての回転抜刀を周囲の不良達に放った。

ザシユ

不良d「痛てえーでも、格好いい…」

無論できるだけ手加減はしてあるので不良達も死ぬことは無かった。それを見ていた頭取は林檎に話しかけた。

リスト「赤井君、凄いね錆君は。刀を使わなくても強いのにあの綺麗な刀を持つと雰囲気から何まで剣士みたいでさ。」

林檎「そうですね。錆君の話だとあの綺麗な刀、薄刀・針を持つと刀の毒が体中に浸透してあんだ感じになるらしいですよ。」

リスト「そうなんだ。さてと、僕も参戦するかな。荒事は苦手なんだけどね。」

頭取の参戦もあって戦況は御伽銀行の勝利が濃厚になった。一方では

ダアン！

浦島「男には触れたくはないのだがな。」

乙姫「太郎様！！！素敵！！！」

伊達に女好きではなかった浦島がそれなりに活躍し、御伽銀行の大神を除く女性陣の見事な連携もあった。だが、一番の要因は

白花「秘剣“逆転夢斬”！」

白花が切り込み、

涼子「はぁー！！！！！！！！！！」

涼子が突撃し、

亮士「くらえー」

亮士が援護するとゆう華麗な連携プレーがあったからこそこの勝利だったのだ。そして

鬼ボス「オラァー！！！！」  
ガンッ

ヒュン

涼子「これで終わりだー！！！！！！！！！！」

ダァン！ビリビリビリー

涼子の一撃が目覚めた鬼ボスの顔面にヒットした。これによって一件落着と思われた、だが

鬼ボス「ハッハッハ！気に入ったぜ。やっぱり強い女サイコーだ！」

鬼ボスは涼子の嵌めていたネコネコナックル改を外し、涼子を人質にした。

白花「大神！」

亮士「涼子!!!!!!!!!!」

白花「貴様、卑怯な!？」

白花はとっさに薄刀・針を構えるが、

鬼ボス「おっと、何構えてるんだよ、無重の剣士。こっちには大神涼子がいるんだぜ?どうすれば良いかわかってるよな。」

白花「くっ……」

白花は薄刀・針から手を離した、その時

亮士「させるか!!!!!!!!!!」

廃工場の2階部分から亮士がダイブしたのだ!!!!!!!!!!

亮士「ウォー!!!!!!!!!!」

ガン!!!!!!!!!!

亮士の決死のダイブが鬼ボスの背中にヒットした。その衝撃で涼子は少し吹き飛ばされたがおかげで鬼ボスの拘束から逃れることが出来た。

白花「今だ! 奥義“薄刀 開眼”!!!!!!!!!!」

白花がその隙を突いて鬼ボスに薄刀の限定奥義を鬼ボスにたたき込んだ。

鬼ボス「ぐはっ!?!」

手加減はしたが薄刀の限定奥義の前では鬼ボスも倒れた。死なない

程度にしてあるから一応、命に別状はないだろう。

鬼ボス「カツコ……」

鬼ボス戦闘不能。

白花「女を人質にとるのは拙者が許さないでござる。」

亮士「涼子を仕留めるのは俺だ……」

二人の最後のセリフは周りに居た人達にかっこいいと思わせるようだった。

檜「森野君も鏑君もとってもかっこいいですよ。」

涼子「そう……だな……」

林檎「涼子ちゃん？もしかして！」

涼子「ちっ違うに決まってんだろ！！！！！！」

林檎「ああ、涼子ちゃんにもついに春が来たんですね！」

乙姫「まあ……！」

おつう「あらあら、おめでとつございます。」

みんなからのお祝いの言葉に涼子は顔を真っ赤にしていた。もちろ  
ん、2階からダイブした亮士は気絶し、白花には聞こえてなかった  
そうな。

リスト「はいはい！これにて解散！」

気絶した亮士を担いだ頭取の一言を合図に御伽銀行の面々は廃工場を後にした。背後に全ての光景の見ていたことも知らずに。

？「涼子ちゃんか…これは面白くなりそうだ。」

場所は変わって御伽銀行前の広場。鏗白花と大神涼子は今日のことを振り返っていた。辺りは綺麗な夕焼けが街を染めている。

白花「今日は本当に大変なめになったな。」

涼子「そう…だな。」

白花「どうしたんだ大神？なんか顔が赤いぞ。」

涼子「／／／／／こっこれは夕焼けの所為だ。そつそれに、“大神”じゃなくて“涼子”でいい！／／／／／俺、亮士と見てくる。」

そう言つて涼子走るようには地上支店の中に入っていった。入れ替わりに林檎が中から出てきた。

白花「亮士の様子はどうだ？」

林檎「今はぐっすり寝てますの。あの様子なら大丈夫そうですの。」

白花「そうか、安心したよ。それより、凄いな亮士は好きな人のピョンチにはいつものヘタレじゃなくてあんなに男らしくなってさ。し

かも、2階からダイブして助けるなんて行動、あれには驚いた。」

林檎「そうですね。でも、錆君も凄いですの。一人で涼子ちゃんを助けに行つて、私達が来る前に不良を何人も倒してたんですの。」

白花「あれはいつもやってることの延長線みたいなもんだから大丈夫だよ。確かにいつもよりは疲れたけどね。」

林檎「それでも凄いことには変わりありませんの。あつ！ひとつ錆君に聞きたいことがありますの。」

白花「ん、なんだ？」

林檎「さつき、涼子ちゃんの顔を見たらとても真っ赤でしたの。錆君何かしましたの？」

白花「何もしてないけど。」

林檎「じゃあ何か言いましたの？」

白花「言ったことと言えば、大神が奴らに捕まった。とき、“背中に助きたい女がいるなら助けるのが男だろ”とは言ったけど。」

林檎「……あーあやってしまったのです。あんなシチュエーションでそんなこと錆君が言ったらフラグがたってしまいますの。」

白花「へ？あれは仲間を助けるときの感じで言ったんだけど違ったの????????」

林檎「違いすぎますの。」

白花「そっなんですか……」

涼子に対して、無意識に無意味なフラグを立ててしまった白花。彼が次は誰にフラグを立ててしまうのお楽しみはここまで。

## 第二話（後書き）

ヒロインにするならこの2人の中で誰がいいか投票してください。  
お願いします。

？ 白雪姫乃

？ 鶴ヶ谷おつう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8964o/>

---

御伽銀行と無重の剣士

2011年10月7日20時52分発行